

サン・テヴルモンの老年

竹 田 順 子

サン・テヴルモンが《ピレネーの和約に関する書簡》によって、マザランの政策を批判したかどで、亡命生活を余儀なくされるに至ったのは1661年、既に四十七歳、そしておよそ九十歳で亡命の地英国に没する迄、再びフランスの土を踏むことはなかった。その間、帰国の望みを持ち続けていたサン・テヴルモンは知人を頼り、友を頼みにして、何とか国王ルイ十四世から帰国の許可を賜りたいと口添えを願っている。しかしいずれの試みも甲斐なく終り、身の不遇をかこつのであった。けれどもついに1688年、帰国しても良いとする王の命がもたらされるが、なぜかサン・テヴルモンは英国に留まるつもりであり、もはや帰る意志のないことを使者に伝えたのである。亡命生活という経済的のみならず、何につけても不安定な暮らしの中で老年を迎えたサン・テヴルモンが精神的には静謐を保ち続けて、ついには祖国に帰ることをも断念したというのは如何なる心境によるものなのであろうか。帰国断念の理由については、これ迄にもいくつかの可能性が考えられている。例えば、1675年英国にやってきたマザランの姪にあたる人、マザラン夫人への恋ないしは熱烈なる友情の故であるとか、オランダ滞在時代の旧知であるオレンジ公ウイリアムが1689年ウイリアム三世として英国を統治する事になって得られた物心両面に渡る生活の安定、などである⁽¹⁾。我々はその理由をサン・テヴルモンが老年期を迎えていたことと考え合わせて、自然に反しないことを最も尊んでいた彼が、あるがままの老いを受け入れるに従ってますますその思いを深め、必然的に帰国断念の心境に至ったのだと考えるものである。以下我々は、当時の書簡や、老年期の著作を通してそれを明らかにしたいと思う。

恐らく1665年頃のものと考えられるグラモン元帥にあてた手紙を読むと、親切的友人知己の助力にも拘らず、誰も王の勸気を取りなすことができなくて、現在の状況が一向に進展する気配の感じられないことに苛立っている様子が見て取れる。「私が王国を出てからこの四年間というものは、半年毎に新たな辛い目に会ってきた訳ですが、それも忍耐力によって出来るだけその辛さをやわらげてはいるのです。けれどこんな無駄な抵抗などしたくはないのです。そうしたからといって不幸から守られるどころか、不幸との付き合いが長くだけなのです⁽²⁾」そもそもの不興の原因となった《ピレネーの和約に関する書簡》にしても自分の方に非はないと信じているので、過ちを許して頂きたいと折れて出るつもりは毛頭ない。「現在私が責めを負っている例の文書によって、私が善きフランス人であると誉

められる日がいつか来るでしょう⁽³⁾』とまで言い切る程であるから、はっきりと国王がと名指しするだけの不遜さはないが、暗に国王の方こそ過ちを覚って下されば良いものかと思っているのである。マザランを批判する文書ではあったが、倦くまでも王陛下の為を思っている事であったからという確信があるだけに、もっと時間をかければ状況は改善されるだろうと、この頃はまだ楽観的である。

その後もサン・テヴルモン⁽⁴⁾の為に王への執り成しを試みようとしてくれる篤志の人が現われはするが、例えば英王チャールズ二世の妹のドルレアン公夫人のように強力な援助が期待されるかと思われたのに、夫人の死によってその約束も空しくなるというような不運が続くばかりであった。

状況の良くなる気配が全く無いからといって、それなら自分の方から王の下に身を低くして許しを乞えるかといえば、その様な事は出来ないしやりたくもないのである。1668年のある書簡では「私の置かれているような状況では、悔いることなど私には到底出来ないような事柄について許しを乞わねばならないのですから⁽⁴⁾」と、自分の方には何らの落ち度もありはしなかったと言わんばかりの一徹さを相変らず持ち続けている。このように考えている人物が王の御機嫌を取り結ぶことは容易なことではないだろう。

恐らく1676年のものと思われる友人エルバール宛の手紙には、友人から健康状態を問われたことへの返事がしたためられてある。それを読むと、睡眠も良くとれ食欲もあるのだが *vapeur* “ふさぎこみ” が無くならなくてね、とこぼしている。けれども精神の方は健全だからと強調して、「私は、老齢や不幸なめぐりあわせの中にいる人間に許されておる分よりははるかに陽気にしております⁽⁵⁾」と友人を安心させるような調子のものである。しかし一向に進展の兆しを見せない中途半端な状況の中で、サン・テヴルモンにとって老いが現実のものとなってきていることは確かなことである。

1674年に友人のドロヌ伯爵が王の不興を蒙り、流謫の身に甘んぜざるを得なくなった。その時、サン・テヴルモンは友の為に、自身が長らく不幸な亡命生活を強いられている経験者としての立場から、具体的な生活の助言を与えている。例えば書物を選ぶ時には「理詰め⁽⁶⁾で我々の精神を強くすることができるという本ではなく、楽しく読めて我々の気分⁽⁶⁾に良い効果をもたらしてくれるような本⁽⁶⁾」が良いと勧めている。自分の置かれている不幸な境涯と戦うのではなく、それを忘れていられるように仕向ける事、それが現に時折ふさぎの虫に取りつかれているサン・テヴルモン自身にとって現実的なやり方なのである。

亡命以前の1656年、同じドロヌ伯爵に宛てた書簡の形で述べられた《*Sur les plaisirs*》の中で「幸福に暮らすには、人生について余り考えるのではなく、いわば自分の外へどんどん出ていくべきである。そして外の事物が与えてくれる楽しみのただ中では、自分自身の不幸を意識するのは避けるべきである⁽⁷⁾』と云い、*divertissement*の必要を説いたのと首尾一貫している訳である。何故目を逸らし、気を逸らすようにと勧めるのかと言

うと、そのような深刻で重大な問題に対処するのには人間の才知は余り頼りにならないからである。「どの様な精神力によっても、我々の条件の苛酷さに打ち勝つことは難しい。けれども要領よく巧みにそこから逸れる事はできる⁽⁸⁾」

従って、現在追放の身のドロヌヌ伯に対して、元気づけることができ実際の生活の役に立つ助言は、祖国の為を思い心を砕くというような暮らしをせよと力付けることではないのは当然である。「あなたのおられる状況では、御自分の為に生きる事、そしてあなたの残りの人生を出来る限り快適に過ごされる事がふさわしいと存じます⁽⁹⁾」この言葉はまことにサン・テヴルモンが自分自身に向かって語ったとしてもおかしくないものである。

老いの身で、自分に残された人生を出来る限り快適に生きるには如何にすべきなのであろうか。その為には老いから目を逸らすことは不可能である。

さてサン・テヴルモンが「老年」を主題にしている作品としては、〈A Monsieur le Maréchal de Créqui, qui m'avoit demandé il y a quinze ou seize ans en quelle situation estoit mon esprit et ce que je pensois sur toutes choses dans ma vieillesse〉の中で1685年か1686年頃に加筆されたと考えられる初めの数ページと、同じく1686年頃の作と推定される〈De la retraite〉である。いずれもサン・テヴルモンが七十歳を過ぎた頃のものである。

人間は年を取るとどの様な変化を受けるか、目に見えて明らかな肉体的変化は別にして精神の傾向はどの様になるものなのか、をサン・テヴルモンは語る。まず明らかに現われてくるのは、自我志向、とも呼ぶべき傾向である。若い頃には、世間の考えとか他人の事が一番気になったものだが「死にかける頃になって⁽¹⁰⁾」、心を占めるのは自分自身のことだと言う。失ないそうになってから、一層それが大事なものになる、そうであればこそ、老年という自分にとって最も切実な問題を見据えることができたのである。

何にもまして精神が自分に向かうという事は、外界からの刺激に対する反応が鈍くなる事でもある。「我々の五感がもはや対象に動かされなくなり、心情も対象から受ける印象に感動しなくなる⁽¹¹⁾」、その状態をサン・テヴルモンはindolence「無感覚」と称する。外からの刺激に余り動じなくなるということ、それは一種の心地良い状態を生む。ことに外界からの刺激が苦痛を伴うものである時には尚更indolenceは快適さを維持するのに都合が良い。

ところでこの作品とやはり同じ頃に書かれた〈Sur la morale d'Epicure〉を見ると、そこにはエピクロスに倣った、サン・テヴルモンの幸福感の基調をなす表現を見出すことができる。即ち「快樂を愛すること、苦痛を避けることが第一にして、最も自然な人間の感情⁽¹²⁾」というものである。けれども、この作品ではindolenceに関して〈Créqui〉のとは少し違った態度を見せている。つまり、「無感覚(indolence)や精神の平静さというのは、弱々しくやつれたエピクロスの最高善となるべきものである⁽¹³⁾」と一見エピクロスのindolenceを否定している点である。これについてNiderstは、〈Créqui〉の中で見せ

たサン・テヴルモンの方々が少々意外で、不自然だと述べている⁽¹⁴⁾のだが果たしてそうであろうか。先の引用箇所が続いてサン・テヴルモンはこう書いている。「体の調子が良くて、楽しみを味わうことのできる人にとっては、思うに、健康は indolence よりも何かもっと生き生きしたもので自分に健康を感じさせるものだ、ちょうど心情が良好な状態にあると平静な状態よりも何かもっと活発なものを欲するように⁽¹⁵⁾」。サン・テヴルモンはエピクロス思想を、エピクロスの身体的、精神的状況に従って、区別をして考えていると解釈の方が妥当である。「私にはエピクロスが若くて健康な時と、老いて病んでいる時とは違った風に見える⁽¹⁶⁾』と述べてもいるのだから。

今、我々が問題にしている〈Créqui〉の中で語っているのは、老年を自覚している、そして恐らく体力も気力も衰えているであろうサン・テヴルモンなのであるから、それを決して“不自然”だとは言えないであろう。

因みにもっと若い頃の作品、確実ではないが1656年頃に著されたと考えられている〈Sur les plaisirs〉では indolence がどの様に考えられていたのかを知ることは興味深い。サン・テヴルモンは言う。「何も感じないという意識が私を悩ます程であれば良いのに、又、自分が束縛されず全くの自由であるという考えが私に、あの、人の善いエピクロスの精神的快樂をもたらしてくれれば良いのにと願っている。私が理解しているこの心地よい indolence というものは、苦痛もなく快もない状態ではない。それは意識の休止と精神の平静さに由来するもので、混じりけのない喜びを鋭敏に感じとることなのである⁽¹⁷⁾』ここでは〈Créqui〉で述べている事と大きな差は認められなくて、老年期に限らずとも indolence が人間の幸福の一条件には違いない。

以上三つの作品の中で indolence という語の意味する所を見た訳だが、中では〈Sur la morale d' Epicure〉において少々調子の違う表現となっていた。しかし先に述べたように、サン・テヴルモンにとっては、健康な肉体の感じる快がまず第一にあり、次に精神的快としての indolence の必要を認めていると考えるのが妥当であろう。

従って再び〈Créqui〉に戻れば、老年期は顕著な姿で indolence をもたらずが、先に挙げた最も自然な二つの感情、即ち快樂を愛する事と苦痛を避ける事の内、「快樂を享受することが必ずしも必要ではない⁽¹⁸⁾」老年期にあっては、苦痛を避ける事に役立つ indolence は明きらかに幸福の主要条件となるのである。

さて、indolence に身を委すことが幸いであるなら、仮に外から苦痛や不幸がやってきた場合には、それに抵抗を試みたり、あるいは平常心を保とうと努力する事が良くないとされるのも当然である。そのような努力はかえって新たな苦痛を背負いこませるからである。自分に非の無いことで、かくも長く祖国を追われているサン・テヴルモンにとってこのような生き方は、自己を正当化し自分を守るのにふさわしいものであったに違いない。しかしながら、老人であるサン・テヴルモンは、人間が皆この様に振舞うべきだと勧めているのではないと、一言付け加えずにはおれない誠実な人である。というのは、人間は年を経

るに従い経験を積み重ね、次第に賢さを身につけていくものだから、従って、老人が賢く行動するのは良いし、それで困難を避けることができるのだが、若い人達がそうである必要はないと言うのである。「若い人が余りに早く迷いから醒めたり、見かけや、評判や、実の伴わない名誉とか、うぬぼれや、夢とかを何とも思わないというのはふさわしくないだろう。(…) あえて言えば、若い人が完全に理性に従うなら、一切従わない場合よりも軽蔑されよう⁽¹⁹⁾」

老年期にあっては、苦痛を避ける為に *indolence* が大いに役立つものであることが理解された訳であるが、更に積極的に苦痛から心を逸らすのに役立つものがある。それは恋愛である。若い頃とは違い、もはや野心もなく栄誉も望まず、気力も衰えた今、生を確実にらしめてくれるのが恋愛なのである。とは言え老人に恋愛を持ち出されて意外の感を抱かぬ人は少なくなろうと思われるが、それならば尚、我々は老サン・テヴルモンの卒直さに耳を傾ける必要がある。彼は言う。「恋愛は死の想いを逸らせてくれる。恋愛がなければ死は絶えず我々の心に生じてこよう。恋愛は想像による恐怖や、心の不安を散らしてくれるのである⁽²⁰⁾」ここにあるのは、若者が普通に思い描く恋愛観とは全く調子を異にする、暗く悲観的な雰囲気漂う感懐である。《L' Amitié sans amitié》という作品には、かのソロモン王が老境にさしかかった時、女性に向かう態度がそれまでとは違うものになったという事を述べている所で、同じ様に恋愛が、老いから心を逸らすのに役立つ事を強調している。「王の思うには、こんな悲しく苦しい老年期にあっては、できる限り自分から逃げる必要がある。そして我々を悲しくさせる考えごとや、不安にする想像などより、我々の辛さを魔法のように楽にする美しい女性の魅力に身を委ねる方がましである⁽²¹⁾」ソロモン王のように知恵深い人でもその知恵で幸福になるすべをもはや見つけることはできない年代にさしかかっているのである。知恵はせめてそれ以上不幸に落ち込まないようにする手だてを教えてくれるばかりである。

ところでサン・テヴルモンが実際に老人の恋をしていたらしいというのは良く知られている。1675年二十九歳で英国に渡ってきたマザラン公爵夫人がその相手で、サン・テヴルモンはその時七十一歳であった。マザラン夫人のサロンの中心人物となった彼が、夫人の傍を離れ難く、後によりやく賜った帰国許可を受け取らなかったのだと *La fargue* などは断定している⁽²²⁾。しかし我々には、彼の感情がどの程度のものであったかを明らかにする根拠は残念ながら無い。

老年期には快楽 *volupté* を享受する必要が無くなると言っている事は先に述べたが、それでも幾つかの楽しみ *plaisirs* を残しておかずにはおれないのも尤もである。その中の重要なものが友情を基本とする人々との交際である。「あらゆる関係の中でも、友情の絆こそ私にとって心地よい唯一のものである⁽²³⁾」老年期には一層大切なものとなる人々との交際、特に社交界での身の処し方について述べた《*De la retraite*》は《*Créqui*》と同じ頃に書

かれたとされるもので見過ごすことのできないものである。そこでサン・テヴルモンは隠退生活についてその本当の意味を探ろうとする。人は老人になると社交界から身を引いて隠退生活に入るのが普通とされている。何故そうするのかという根本的な理由は、ひとえに老年によってもたらされる物笑いの種となるような事を人々の目から避ける為である。そうすれば以前のままの評価を保て、欠点をさらさずにいられる。ところが不幸な事には、人は自分が物笑いの種になるような老年期特有の変化をした事に気がつかない。だから簡単なことではないけれど老年期こそ最も注意深く自己の性質を研究しなければならないのである。そして自己の欠点を捨て去ろうと努力するのは無駄なことで、人々から見えないよう隠そうと決意することこそが賢明なやり方なのである。老の自覚をせず安楽に生きるのではなく、理性に諮り身の引き時を弁え意志を持って老年期を過ごさねばならないのだとしたら、これは何と不安で深刻な生き方ではないか。老年期にこそ安心が望まれよう。彼は言う。「生と死の間に、しばし時を置かねばならない。そしてその時を過ごすのにふさわしい場を選ばねばならない。できれば信心深く、少くとも分別をもって過ごせるように。言いかえれば、安心感を与える信心によるか、心の平安を与える理性によるかして²⁴⁾」

不安な老年期に安心を得んがために、信仰に心が向かうのは、ちょうど若者が快樂に向かうのと同じで自然のなりゆきであると彼は認めている。けれど信仰三昧の隠退生活が最良だと勧めているのではない。そこに心地良さを見出すのは難しく、理性を犠牲にすることが多いからである。隠退の場所として修道院が本来あるべき姿で設けられているなら、神の支えと人々の援けと二つながらに得られる休らぎの場となるであろうとは思っている。けれど現実には煩瑣で無益な事柄に従順を強いられ、苦を癒し休らぎを得るところではない。従ってサン・テヴルモンには隠退の時を過ごすのにふさわしい場は、通常考えられるような社交界を遠く離れた信仰生活にあるのではない。

ところが、老年期にも理性を頼みに生きる必要をあれ程強く説いたサン・テヴルモンだが、結局彼自身が選んだ生き方は自然に任すということであった。さしせまった問題である老いと、それのもたらす精神的肉体的苦痛を意識しつつ、その上祖国へ帰る希望はかなえられそうにない八方塞りの中で、老いにも回りの状況にも抵抗することなく生きるには、自然に任すという生き方がやはり、彼にとって苦痛を最少限にできる最良の道であったのだらうと想像できる。「隠退するに及くはなしという時期のあることを私は認める。けれどもそう確信しはしても、私の隠退については私の理性よりも、自然に多く委せているのだ²⁵⁾」

それ故に、彼の晩年の日常は「完全な社交生活でもなく、完全な隠退でもない²⁶⁾」、暮らしに落ちつかざるを得なかったのであろう。親しい友人達との心地良い交際を通して、日は老年のサン・テヴルモンを穏やかな寛ぎで満たしたであろう。

さて、この時期に先立ち、1678年から79年にかけてナイメーヘンの和約が結ばれ、それ

に伴い亡命者達の多くが王の許しを得て呼び戻され、友人ドロヌ伯爵も宮廷に戻る事になった。当時相変らず帰国の意志を持ち続けていたサン・テヴルモンはドロヌ伯に王への恭順を誓う書簡詩を託したが、やはり許しは出なかった。1681年、前述のクレキー元帥に宛てた手紙では、太陽の少ないこの地の気候を嘆き、リウマチに良くないので、暖いモンペリエに行けたらとこぼしている。

ところが、1686年クレキー元帥宛ての手紙によると、サン・テヴルモンはクレキー元帥の勧めに従い、帰国を叶えて貰う為に王に忠誠を誓う手紙を出したらしい事が伺えるが、それにしてはなぜか、熱意が感じられない。クレキー元帥からは、王を誉め称えるようにとの忠告を受けたらしいが、「下手な誉め方をするよりは、全然誉めない方がましだと思²⁷⁾」とさえ言う位である。恐らくこの時期にサン・テヴルモンは帰国の希望を捨てたものと思われる。捨てたという言葉はどこにも述べられていないが、「人は現在置かれている状況に満足しなければいけないのです。過去の状態を思い出すことに空しい慰めを求めたりせず²⁷⁾」という言葉は諦め以外の何であろうか。

1688年七月、ついに、待ちかねたはずの帰国の許可が下り、使者としてグラモン伯爵がロンドンに遣わされた。しかしサン・テヴルモンはもはや帰るつもりはないと伝えたとのことであった。

不幸や苦しみから目を逸らすことが、とりわけ不幸な境涯に置かれている者にとってはそれ以上不幸を大きくしない為にも必要な事だと説くサン・テヴルモンも、帰国の希望だけは長年捨てきれずにきた。しかし自己を曲げたくはないという思いと、現在の自分の老いを考え合わせ、現状に甘んじること、現実を認めてこの地での生活を続けることが最良であると判断したのだと思われる。「必ず終りがあり、いつ何時終りになるかもしれない人生をあてにするのは気の狂った者のすることだ²⁸⁾」と言うサン・テヴルモンにとって、あてになるもののない人生への心静かな諦めが老年の彼の幸福感を支えているのである。

BIBLIOGRAPHIE

作品の引用は次の版によるものである。

SAINT-EVREMOND, *Oeuvres en prose*, éd. R. Ternois, Paris, 1962-1966, 4 vol.

SAINT-EVREMOND, *Lettres*, éd. R. Ternois, Paris, 1967-1968, 2 vol.

注

- (1) *Oeuvres en prose*, I-xxxix.
- (2) *Lettres*, I-84.
- (3) *Ibid.*, I-85.
- (4) *Ibid.*, I-163.
- (5) *Ibid.*, I-217.
- (6) *Ibid.*, I-252.
- (7) *Oeuvres en prose*, IV-12.
- (8) *Ibid.*, IV-13.
- (9) *Lettres*, I-253.
- (10) *Oeuvres en prose*, IV-103.
- (11) *Ibid.*, IV-104.
- (12) *Ibid.*, III-426.
- (13) *Ibid.*, III-437.
- (14) SAINT-EVREMOND, *Textes choisis*, éd. A. Niderst, 1970, p.322.
- (15) *Oeuvres en prose*, III-437.
- (16) *Ibid.*, III-433.
- (17) *Ibid.*, IV-21.
- (18) *Ibid.*, IV-105.
- (19) *Ibid.*, IV-106.
- (20) *Lettres*, I-297.
- (21) *Oeuvres en prose*, III-281.
- (22) M.-P. LAFARGUE, *Saint-Evremond ou le Pétrone de XVII^e siècle*, Paris, 1945, p.59.
- (23) *Oeuvres en prose*, IV-107.
- (24) *Ibid.*, IV-291.
- (25) *Ibid.*, IV-298.
- (26) *Ibid.*, IV-299.
- (27) *Lettres*, II-97.
- (28) *Oeuvres en prose*, IV-149.

(旧姓松本 D.54)

大阪大学非常勤講師